

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372701021		
法人名	社会福祉法人順和会		
事業所名	グループホーム陽なたぼっこ		
所在地	熊本県阿蘇郡南阿蘇村河陽4463番地		
自己評価作成日	平成28年11月10日	評価結果市町村受理日	平成29年1月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成28年11月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

所々山崩れはありますが、緑豊かな自然に囲まれ雄大な阿蘇山の麓に陽なたぼっこはあります。各居室からの眺めも良く春には桜、秋には紅葉が楽しめます。熊本地震後は普段の生活を取り戻す為、法人の職員、陽なたぼっこ職員、ボランティア様、一丸となり頑張ってきました。7月にはショッピング、8月には花火大会を実施、11月現在ほほ元の生活を取り戻しつつあります。当事業所は、介護支援専門委員、看護師、介護福祉士、等の有資格者を数多く配置し専門性を活かして支援に取り組み、入居者の皆様に安心して生活していただいております。特別養護老人ホーム、デイサービスを併設し連携がとれる体制になっています。地震直後はデイホールへ避難し、ここでは栄養課を含めた特養職員、デイ職員の協力もあり入居者の皆様に安心して生活して頂きました。又、近年の重度化に伴い的確な対応ができる様勉強会を重ねています。上村ぬくもり診療所、さずな歯科、悠心病院からの往診も受け、入居者の皆様はもちろん、御家族の皆様にも安心していただけるネットワークを構築しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

社会福祉法人の一角を占めるホームでは、これまでの積み重ねが震災時の様々な協力支援体制の強化に繋げ、半年間は厳しい現状にあつたにもかかわらず、入居者には笑顔と余裕あるケア・声かけを行う等、“ぬくもりと安心の福祉の基本方針をまさに実践している。関係福祉施設の連携が試されたこの震災を必死で乗り切った職員のケア力の高さが、100歳であっても生きがい作りにと活動的な生活を支援する姿勢に表れ、家族への報告方法(可視化)等が更に家族との関係性を深め絶大な信頼を得ている。現在のホームは賑やかな話に花が咲き、楽しいひと時を過ごされる姿や、ごみ捨てやおやつ取りに向かう方等役目のある生活ぶりは普段の日常であり、陽なたぼっこという名が示す温かいホームが形成されている。現在も通勤に時間を要しながらも、業務見直し等全職員が心を一つに真摯にケアに取り組む姿勢に敬意を表したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	当法人の理念である「ぬくもりと安心の福祉」を基に5項目を掲げている。各職員については、各自名札に携帯いつでも確認できるようにしている。又、外部へは広報紙や運営推進会議等を活用している。	日々のケアの中で、入居者との信頼関係作りには笑顔で接することや、余裕あるケア・声かけ等理念を具体的な形で捉えている。震災により職員の退職という現状にもめげず、必死にケアに取り組まれた半年である。不安な状況の中で、職員のかかわりの重大さを再確認し、理念を原点にしたケアに真摯に取り組み、外部への啓発及び地域とのこれまでの関係性が、この難局を乗り越える活力源として生かされている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	老人会・美容院・民生委員・消防団等と連絡を取合い、地域の情報収集に努めている。又、嗜好品の購入等も地域のお店を利用し出来る限り地域資源を活用するようにしている。	恒例行事である子ども神輿の訪問やボランティアと交流(花火大会やひよっこ踊り、買物への同行等)の他、老人会へ出かけたり、おとこしへの参加(昔からの慣習)等地域の中での生活は充実している。地産地消の他、消防団として常会や夜警等にも参加する等地域の一員として積極的に関わっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	学生の実習や福祉体験等の機会を活用し認知症に対しての知識や技術を伝えるようにしている。又、慰問や面会等の機会も大切にしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	4月から偶数月での開催を予定していたが熊本地震の影響やそれに伴う退職等で10月に開催したのみ。ご家族を対象に開催し主に地震後の状況や避難生活で対応した事等を説明した。	運営推進会議は年に4回をめぐりに開催することとして、内1回は全家族に案内している。今年度は地震後の開催であり、スライドによる様子や実際の避難生活を確認し、双方向の活発な意見交換が行われている。	回数の如何に関わらず、充実した会議であることが議事録により確認できた。年6回を目指し、今後も情報発信元の一つとして、定期的な開催が望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	法人を通して事業所の現状を報告し、又、運営推進会議や訪問調査の際に直接伝えるようにしている。互いの関係も良好であり、今回の熊本地震の際にも様々な協力体制がスムーズに行えた。	役場には頻繁に書類提出に出かけ、情報交換を行い、運営推進会議・介護認定調査等の訪問等これまでの顔の見える関係性が、今回の地震時の行政からの素早い対応に繋がっている。(ライフラインや物資、食糧等)	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	徘徊がある入居者の方がおられ、ドアセンサーを当初活用していたが、地震後落ち着かれない時が増え、安全性の観点から1階フロアのみ、時々施錠を行っている。そのご家族や関係するご家族へも事情を説明。出来る限り施錠に頼らないよう職員一人一人に意識を持つよう指導。又、勉強会を開催し日頃より拘束についての意識を持ち、日常生活の中に拘束を取り入れないように注意している。	身体拘束の具体的な行為や弊害は全職員が正しく認識しているが、本年は地震後、入居者の不安や職員体制等急激な状況に、拘束を目的とするものではなく、安全を保つためとして家族に説明し、“施錠に関する承諾書”を新たに作成し、同意を交わしている。また、夜間の安全確保及び転倒予防目的で使用するセンサーマットも同様である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	常日頃より、職員間でコミュニケーションを図り互いに胸の内を語り合える関係作りを行う事で、心身共に健康な状態で業務に就けるよう心掛けている。又、希望休の導入等も取り入れそれが虐待防止にも結びつくと考えている。勉強会実施。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	勉強会を実施し制度に対する理解を深める努力をしており、法人とも連携しながらご家族等からの問い合わせにも速やかに対応出来るようにしている。今後、研修に参加する機会等があれば、積極的に取り組んでいきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際に、ご家族や本人に対し書類内容等の説明を行い、電話での問い合わせについても対応することで、理解を得られるよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	各担当が主となり、入居者やそのご家族からの意見を把握。ケア会議の場や申し送りノートを活用し各職員へ伝達し日常のケア運営へ繋げている。	担当制として、地震で中止していた事案が徐々に対応できるようになり、写真を添えた手紙の送付等可視化した報告が家族から好評を得ている。介護計画書見直しに向け、担当者会議への参加有無とともに意見や要望を前もって収集し、運営推進会議も年に1回は全家族との意見交換等を行っている。入居者・家族との良好な関係が築かれており、訪問時の家族の言葉や入居者の声に耳を傾け、記録に残し、原因追求と対策を全員で検討する体制とし、サービス向上に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	通常は、幹部会議・職員全体会議・ケア会議・業務改善会議を行っていたが、熊本地震の影響で現在は、幹部会議・ケア会議のみとなり随時報告する形をとっている。又、中堅職員のみでの会議を開催しケア会議の場で提案している。	幹部会議や職員全体会議・ケア会議・業務改善会議の他、中堅職員会議等職員の意見や提案を出す機会が多く、重度化が進むことも想定した会議や業務見直し等合議により決定している。法人として職員の悩みを聞き取る等ストレスケアに努めている。レクリエーションの充実や、ケアの質を更に上げたいとして食事作りを中止する等職員の提案を反映した運営体制である。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	震災により通勤困難な職員に対しては、宿泊場所として、休憩室等を提供されており、通勤手当の追加支給もなされている。スキルアップについても、情報の提供や資格手当の支給という形で、職員のやりがいに繋がっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	地震の影響での退職や道路事情により、外部での研修の機会が減り、現状としては、施設内の勉強会が主となっている。復興とともに外部研修にも出来る限り参加していきたい。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	介護専門ボランティアの受け入れがあり、県内外から多数の方との交流が出来た。実際に現場に入っていた事で様々な知識の習得がありサービスに繋がっている。ボランティア終了後においてもFacebookを活用し交流が継続している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前より情報収集に努め、特に意思表示の困難な方に対しては、主にご家族から情報提供を受けている。また、それを職員全体で共有する事で不安なく対応出来、信頼関係が構築しやすい環境作りが行えている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族に対し、事業所の理念や方針等を理解して頂けるよう配慮し、要望については、出来る限り受け入れ、より良いサービスに繋げている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人・ご家族のニーズに対応出来るよう幅広い視野でサービス内容を提案し、他の事業所との連携も図りながら対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	個々の入居者が取り組める事を職員全体で把握し、日々のサービスに繋げている。又、利用者と職員が共同で行う事で信頼関係が深まり、互いのことを知りあう良い機会となっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日常生活の様々な困難に対しては、ご家族への協力を得ながら一緒に支援して頂けるよう努めている。嗜好品の購入から病院受診など協力が得られる部分については極力相談するようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	知り合いが来荘された際には、それが他事業所であっても交流出来るよう配慮し面会も勧めている。又、地域との繋がりも大切に、老人会の参加や地元美容院等の利用も取り入れそれまでの生活を継続的に支援している。	隣接デイサービス利用される家族等との相互訪問交流や、毎月の地域の老人会への参加を顔見知りの方々と会う機会とする方、地元の子ども神輿のやひょっとこおどりボランティアの訪問、美容院からの送迎等これまでの関係性が断ち切れないよう支援している。地域のおとこし等昔からの慣習にも参加を支援し、相撲巡業見学やもとの職場との関係性を継続すべく食イベントへの参加を支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	レクリエーションや行事、家事活動を通して、入居者同士がより良い関係を構築出来るよう配慮。内容も個人で出来る事、協力し合える事を分けている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	長期入院等により、契約が終了した場面にもお見舞いや面会等行い、本人・ご家族との関係が維持出来るよう努めている。また、契約終了後も、関係機関との連携を図り、ご家族からの相談等にも対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	現在の思いや意向等、日々の声掛けや傾聴にて把握に努めている。困難なケースや意思の疎通が難しい場合は、ご家族にも相談、協力を頂き、また、会議等にて全職員で検討。出来るだけ本人の希望や意向に添えるよう努めている。	職員は一人ひとりに寄り添い、会話に努めており、したい事や食べたい物、買物等直接の申し出に随時応えている。自宅での習慣対策に、主治医や家族と話し合い、プランに反映させる等困難な状況にも応えようとの意識が高く、職員が対策を試行錯誤しながら本人の思いに沿うよう支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	情報書類等を確認。又、本人やご家族・知人から出来るだけ多くの情報を収集し、出来る限り生活歴に添ったサービス提供に努めている。また、そこで得た情報を記録し保存。サービスに活用している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活状況、心身状態等をケース記録、個人表に記載。また、特記事項等は、申し送りノートを活用し、全職員で一人一人の現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネージャーと担当職員が共同でアセスメントし、本人、ご家族のニーズに反映した介護計画原案を作成。ケア会議にて全職員と討議。ご家族にも参加して頂き、現状に即した介護計画を作成している。	入居者及び家族の希望や意向や、担当職員の気づいた点やできる事・しているとADLとのギャップを把握し、介護計画担当者と担当職員とで話し合いを行っている。ケア会議により継続可否や追加等を見極めている。個々のニーズに基づいた詳細な具体的サービス内容であり、100歳といえども生きがいつくりへ向けたプランに個別性が表れ、体調変化による見直し等現状に即したプランが作成されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の状態の変化や、その人に合ったケアを実践し、ケース記録に記載。また、申し送りノート活用し全職員が状況の把握、共有出来るよう努めている。担当職員は、評価やプランの見直しにこれらを活用している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	行政や医療等、他職種との連携を図り、本人やご家族の変化するニーズに対応出来るよう努めている。また、緊急時にも24時間対応出来る医療連携体制を整えており、出来るだけ多様なサービス提供が出来るよう努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	行政や各協力機関からの情報、地域のボランティア団体や老人会等、幅広く地域資源を活用しており、また、行事活動においても、地元の方からの慰問や出来る限り地域へ出かける事で、繋がりも継続出来るよう配慮している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	契約締結時に、協力医療機関等の説明を行い、同意を得た上で主治医の変更を行っている。本人、ご家族の希望を大切に、専門医等の受診についても対応している。遠方の場合は、ご家族へ送迎等協力を依頼、また、困難な場合や緊急時にはこちらで対応している。	入居時に協力医療機関について説明している。現在は全員が敷地内にある診療所をかかりつけ医としており、家族や職員にも心強いものとなっている。専門医の受診時はホームや、遠方で時間を要する場合は家族の送迎など協力を依頼している。職員は車椅子対応の体重計による計測や日々の健康観察の徹底により、異常の早期発見及び必要な医療支援に繋げている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者の健康状態、特変時には担当看護師に報告し、指示を受け対応している。また、法人の看護師とも協働しており、適切な受診等スムーズに対応出来るよう医療連携体制を整えており、健康維持が出来るよう努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は定期的に面会を行っており、また震災の際、県外の病院に入院された入居者にも面会に行き、心身の状態等の把握に努めている。担当看護師等との情報交換や協力医療機関、病院関係者とのより良い関係づくりにも努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時、ご家族に事前指定書及び重度化指針を説明している。事前指定書については、いつでも確認出来るよう個人ファイルにまとめており、又、主治医へも報告。本人、ご家族の意向について都度聞き取りを行っている。	入居時に重度化に関する指針や事前指定書について説明を行っている。指定書は本人の状況に応じて家族へ再確認しており、2年間を過ぎたら取り直しを行っている。これまでギリギリまでホームでの生活を継続し、医療機関で終末を迎えられた方が殆どである。今年度の職員会議の中で看取りに関して職員の不安や他の入居者へのケアへの繋がりなどについて、意見を述べる機会が持たれている。また、看取りに関する研修の中で副施設長により職員のメンタルにも配慮した内容が伝えられている	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	応急手当や初期対応等、看護職員からの指導を受けており、勉強会等も実施。また、医療連携手順表を事務所に掲示し、入居者の急変や事故発生時に対応出来るよう努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人及び陽なたぼっこで定期的に訓練を実施。又、消防団の活動に参加し、情報交換を行っている。今回の地震発生の際、消防団員による指示、協力により、職員も的確に誘導する事が出来たが、女性職員だけの避難誘導には不安があった為、シーツを使った避難誘導訓練を実施し、災害時に女性職員だけでもスムーズに誘導が出来るよう努めている。	法人やホームで避難訓練を実施している。(10月と3月に予定)入居者の命を守ることを一番に誘導を行い、訓練後の反省を有事に活かすこととしている。日々の安全点検や加湿器の水確認なども業務の中で行っている。職員が消防団の常会や夜警への参加した際、協力を依頼する等、協力関係を築いていたことが、「地震本震時消防団が直ぐに駆けつけ、避難移動を手助けしてもらえた」と、感謝し、避難について考えるきっかけとしている。	今回の熊本地震では大きな被害や恐怖をもたらしている。今後も入居者や職員にとって安全な環境の確保が期待される。また、非常食にも繋がる取り組みとして、カップ麺を用いた食事支援を検討してみたいとしており、今後の取り組みに大いに期待したい。

IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援

36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者に対応する際、目線を合わせる・丁寧な声掛け・言葉遣い等に配慮し、その人の尊厳やプライバシーを損ねないよう努めている。又、共通認識が持てるよう勉強会も実施している。	「自分ならこういう対応をしてもらいたい。職員配置は入居者に関係はなく、ゆとりを持って接することが重要である」と、管理者は指導している。今回の震災では、訪れたボランティアの接し方から、自身の関わり方を振り返る機会となった事に職員は感謝している。個人情報や守秘義務の徹底については、入職時や法人全体で指導が行われている。	
----	------	--	--	--	--

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	担当制を導入し、本人の思いや希望等を把握。仏前支援や嗜好品の購入等、出来る限り希望に沿った対応が出来る様にしている。夜食を希望される方へは、ご家族の協力もあり軽食を提供。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	大まかな日課はあるが、本人の思いに沿った生活が送れるよう支援している。その時々で声かけを行い入浴やレク活動・散歩など出来る限り対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	化粧や毛染め、美容室利用等入居者一人一人の要望に応じられるよう努め、いつでもその人らしい身だしなみやお洒落が出来るよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	おやつ作りやお盆拭き・台拭き等、入居者の能力にあった部分を取り入れ、職員と会話をしながら楽しまれて参加されている。又、県外から来られたボランティアの方へは、郷土料理を入居者の方が先頭に立ち作り振舞われた。誕生日の日には、希望食を提供している。	現在ご飯のみをホームで炊き、副食は法人厨房で作られている。そのような中で、9月には恒例のソーメン流し(雨天で屋内でソーメン食に変更)が行われ入居者も、喉越し良く食されたようである。食事やおやつ時などに提供するお茶は、美味しい入れ方を学びながら、正月・お盆・誕生日など節目の時には特に美味しいと喜んでもらえるようにしている。	震災後職員は弁当を持参しているが、人的余裕ができた場合は、1食だけでも入居者と同じ物を提供できないか、厨房と検討されることを期待したい。また、ホームでの調理は現在困難な状況であり、職員のアイデアで楽しい食事となるような取り組みに期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	主治医や管理栄養士の下、個人に応じた食事や水分を提供しており、禁止食品についても代替え食の提供が出来る。また、食前に嚥下体操を取り入れる事で嚥下力低下の予防に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯ブラシの他、歯間ブラシ、舌ブラシ、スポンジ等個別に応じたの道具を使う他、週に1度の訪問歯科診療を受ける事で口腔内の清潔保持に努めている。熊本地震後は歯科医師(災害支援医療チーム)らによる定期的な訪問が受けられたことで、口腔内を清潔に保つ事が出来た。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の意思表示が難しい方には排泄表を使ってパターンを掴む他、表情や行動にも気を配っている。又、定期的に個々の排泄状況を確認し、おむつを使用すべきかの検討を行っている。基本としてトイレでの排泄支援している。	自立での排泄や、誘導を必要とする方には表情や仕草から察するなど個々に応じた排泄を支援している。また、基本としてトイレでの排泄としているが、検討を重ねおむつへ変更する場合もある。夜間はポータブルトイレの使用もあり、週1～2回徹底した掃除日を設け、清潔に管理している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の体操や、水分制限のない人には十分な水分を提供する事で便秘の予防に努めている他、医療と連携し個人に合わせての下剤を使用し適宜調整も行なっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴時間や、馴染みの人と入りたいとの希望があり柔軟に対応している。熊本地震後、しばらくして地域のバラ園より花びらを頂きバラ風呂を実施した際も好評を得る。また、入浴は毎日出来る体制を整えている。	毎日入浴を準備し、週2～3回、個々の体調に配慮しながら実施している。熊本地震後は職員の勤務体制にゆとりがない時もあるが、法人全体でサポートをしたり、仲良しさん同士での入浴や地域にあるバラ園の花びらを使ったバラ風呂など、寛ぎや楽しめるよう支援している。また、季節に応じて更衣場を含めた温度管理や見守り、2名介助での支援などプライバシーに配慮しながら安全な入浴に取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個人の年齢や表情等に気を配り、意思表示の難しい方にも適宜休息を促すほか、日中のレクリエーション等の活動を取り入れる事で昼夜逆転を防ぎ、夜間の睡眠に繋げている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方時に処方箋を熟読する他、内服変更時には調剤薬局からも連絡が入ることで副作用等の理解が出来ている。また、内服準備から服用する迄複数の職員が関わる事で誤薬防止にも努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	週に数回のレクリエーションの時間を設けた事で活気のある時間を過ごす事が出来ている他、ゴミ捨てや食事やおやつを一緒に取りに行く事で、馴染みの人や職員と会い会話を楽しみ気分転換にもつながっている。また、担当制を用いる事で嗜好品の購入等柔軟に対応出来ている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	職員の不足や入居者の状況の変化に伴い、ボランティアの協力なしでは外出は難しくなっているが、知人の送迎による老人会の参加や地域美容室送迎の髪カットは熊本地震後も継続出来ている。	熊本震災後は外出が減少していたが、7月には隣町にあるスーパーへボランティアと共に買物に外出されている。また、地元物産館で開催された復興支援、北陸直送の『サンマ焼き大会』にも数名が参加し、秋の味覚を楽しまれている。毎日のゴミ出しを日課とされる方、併設デイサービスに知人を尋ねる方、地域での年末おとし越しへの参加など、個別での外出支援にも取り組んでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人で管理できる方は自己管理としており、ショッピングやヤクルト販売の他、面会時に孫にお小遣いを渡す等在宅時に近いお金の使用が出来ている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時に職員の介助でかけており、先方を確認し本人と替わり間違い電話を防止。又、取次も適宜行っている。年賀状や暑中見舞いを入居者と担当で作成し、写真を載せ元気な姿が確認できるよう援助している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	手作りのカレンダーや日常の行事写真等を掲示し、季節の花を飾る等行いゆっくと過ごしつつも楽しめる空間作りに努めている。また、外気を感じる事を大切にしながら空調管理も行なっている。	玄関先には入居者と一緒に植えた花苗のプランターが訪問者を迎えている。ホーム内は外出、行事の際の写真や共同製作品が掲示されている。また、家族や職員の持ち寄った花が和やかさや季節感を醸している。リビングはソファやテーブルの配置等その時々で検討されている。廊下やトイレなど共用空間はゆとりの広さであるが、自立歩行や車椅子利用者にとって妨げになる物がないかなど検討し、安全な移動に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングソファや廊下の長椅子、居室と 思い思いの場所で談話場面が見られている。 又、プライバシーの配慮が出来るよう談話 室を準備している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かし て、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしてい る	使い慣れた生活用品から仏壇の持ち込みま で今までの生活に近い環境に近づけるよう 取り組んでいる。また、誕生色紙や写真、ク リスマスカードを飾られたりと個性溢れる居 室空間となっている。	個別の暖簾や表札が付けられた居室から は、裏庭の木々の紅葉など季節の移り変わ りを間近に見ることができる。入居時に馴染 みや思い出の物品の持ち込みを依頼してお り、冷蔵庫やタンス、家族の写真などの他、 仏壇や遺影の置かれた部屋もある。また、 スッキリとした室内の方を好まれる方もおら れ、職員は物品の多少に関係なく、自分の部 屋として安心して過ごせる環境を優先に居室 作りを行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかるこ と」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活 が送れるように工夫している	居室の入り口には部屋がすぐわかるように 個別の暖簾をつけ、その人らしい表札を作 成。車椅子・シルバーカー・歩行器と移動手 段も本人に適したものを使用して頂き自立 した生活を送れるよう努めている。		